

令和7年度岐阜県青少年美術展青年部の選定評

絵 画	昨年より24点少ない204点の応募点数であった。昨今、生成AI等の様々なビジュアルメディアが広がる中、改めて自らの身体性を伴いながら描く意味とは何か。出品作品からは、作者が自分の作品と対話しながら、制作の過程でやり取りしている跡が見られた。様式の新しさに捉われることなく描くことそのものの手応えを感じている様であった。
デザイン	問題提起よりイラスト的な作品が大半を占め、ユーモアのある作品が印象に残った。計画的に描き込めた作品が入賞作品に選ばれている。題名に現れる、何を表したいのかをはっきりさせると良い。今回はデジタル作品の応募が目立ったが、まだ手書きの置き換えに留まる作品が多く、デジタルならではの特徴をもっと引き出した作品に期待したい。
立体造形	昨年より点数は減ったが、密度のある作品が多く、その中で陶器・彫塑など存在感のある素材のものが印象に残った。立体造形は、思いついたアイデアにとどまらず、しっかりした形にまで作りこみ、説得力を持たせることが大切であると実感させられた。各学校により環境は違うが、それぞれが納得いくまでじっくり時間をかけ、思いが伝わるものを作っていただきたいと思う。
書 道	応募点数が増加に転じたことはうれしい限りである。全体としては漢字の書が多く、なかでも多字数の行書に力作が多くみられた。仮名の書では細字の臨書に秀作が目立った。漢字かな交じりの書にも佳作がみられた。表装の状態がよくないために、評価を下げざるを得ない作品も複数あったことは残念であった。出品に当たって注意したいところである。
写 真	写真に良し悪しはない。なぜなら、作者が好きでシャッターを押した感情の産物だからである。しかし、写真を鑑賞する時、あるいは、写真を始めたころは、特に自分の作品の見方が気になるものだが、そんな時は、作品に意図、一貫性、独創性があるかを自問すると良いだろう。今回の応募作品は、表現がより豊かに、テクニックも工夫され、上記3つの要素も伝わってくる。